

関係機関の連携・情報の共有化による総合的な支援の確立を目指して

<シンポジスト>

- 内藤 孝子 氏 (NPO 法人全国 LD 親の会 理事長)
上野 一彦 氏 (東京学芸大学総合教育科学系臨床心理学分野 教授)
日詰 正文 氏 (厚生労働省精神・障害保健課・発達障害対策専門官)

<司会者>

- 笹森 洋樹 (国立特別支援教育総合研究所)

はじめに司会者の笹森より、発達障害のある子どもの支援のための関係機関の連携、特に情報共有の在り方について、保護者、教育関係者、医療・福祉・労働関係者、それぞれの立場から提言いただき、総合的な支援体制の確立に向けて考え合うという本シンポジウムの趣旨の説明、及び各シンポジストの紹介があり、続いて各氏からの話題提供が行われた。

内藤氏は、保護者の立場から、これまでの LD 等の発達障害のある子どもへの支援の実態について、全国 LD 親の会会員に行った調査を踏まえ、多くの保護者や本人の思いを紹介しつつ述べるとともに、子育ての考え方を提案することの必要性等、これからの LD 等の発達障害のある子どもへの支援に期待することを提言した(要項 p5-6 参照)。

上野氏は、教育の立場から、特殊教育から特別支援教育への転換がもたらしたものとその意義に触れ、LD 教育の現状から、子どもが利用しやすいシステムの充実、指導法等の集積と活用等、今後の課題を具体的に整理・提言した。さらに、課題解決に向けて発達障害に関する理解を社会に広げていくことの重要性に言及した(要項 p7-8 参照)。

日詰氏は、医療・福祉・労働の立場から、発達障害者施策推進の今後の方向性、厚生労働省における発達障害者支援施策等を紹介し、地域支援体制の整備、支援手法の開発、人材の育成、情報提供・普及啓発等の課題に触れた(要項 p9-10 参照)。

<討議>

関係機関の連携・情報の共有化ということについては、保護者・本人の理解、学校等との連携、通級指導教室・センター機能等の活用、地域への理解啓発、等々、様々な側面が考えられるが、まず、学校等に対して保護者の立場から内藤氏は、保護者は良い教師に巡り会うまでに、子どもが幼少期の頃から子育てを否定されるような対応をされた経験が少なくなく、保護者自身の自尊感情が低下していることも多くある。これまでの子育てを否定せず整理できるような対応の重要性を述べた。会場の参加者からも、保護者が頑張らなくてよいように、教師や保育士等の専門性の向上を求める意見が述べられた。上野氏は、良いシステムにしていく上での保護者の役割に触れつつ、保護者が自分らしい時間を持つような支援の重要性に触れた。日詰氏は、支援の現場の専門性・実践力の向上に関して、使える情報の収集・整理、研修会の実施・充実、チームで個人の力を引き出す、等の事項を挙げた。内藤氏は、チームでの支援ということに関連して、保護者も含めてのチームで

あり、保護者がうまく相談を活用する力をつけていくことの必要性にも言及した。

また、学校等において子どもの支援に関わる様々な人の中での情報の共有について、校内委員会や専門家チームの充実・活用、学校が外の力を借りることの必要性、等が議論された。会場からも、地域の状況についてのコメントがあり、支援体制がうまく機能している学校の取り組みを発信すること、支援体制の確立に向けて行政と連携すること、等の重要性が述べられた。

最後に、国立特別支援教育総合研究所に設置された発達障害教育情報センターへの期待として、どこでも誰でも利用できる、子育ての指針となる、資源の集積にとどまらず利用方法もわかる、共に取り組む必要が伝わる、繋がっていることがわかる、等が述べられた。